



お伽訓話

不思議の火打石

硯 山 人

或る日の事一人の兵隊様が田舎道を散歩して居りました。すると向うから御婆様が一人杖にもたれながらこちらへ参りました。そして兵隊様にゆきあひました時御婆様は丁寧ていねいに腰こしをかゝめまして。

「私わたくしはあなたに一つの御願おねがひひが御座ござります何卒なにとぞきいて下くだされませんか。」
と申まをしますと此この兵隊へいたい様は大層たいそうよい人ひとでしたから喜よろこんで。

「私わたくしに出来できます事ことならば何なんなりとも。」
と申まをしますと御婆おばあ様は自分じぶんの持もつてゐる杖つえでむかうに見みえてゐました大きな大おほ

きな杉の木を指しながら。

「あの高い大きな杉の木が御見えになりますか。あの木の頂上まで御登りになると大きなく洞穴があります。私はあなたの腰の廻りに紐を結んでをきますからその洞穴からドンく下の方へ降つてあらつしやると大層廣々とした所に出ます。儲そこには三つの部屋があります。先づ第一番目の戸を御開きになるとその部屋の真中に大きな箱が一つ置いてありますそしてその箱の上に犬が一匹番をしてをります。けれどもその犬は大變大きなまるで御皿のやうな目を持つてゐます。けれ共あなたはちつとも恐れる事はありません私はあなたに此の前掛をあげます此の前掛を擴げて其の犬を此の前掛の上に置きさへすればちつとも悪い事はしませんそしてだまつて此の部屋を通つて御仕舞なさい。その次の部屋に御はいりになるとやつぱり真ん中に大きな箱が置いてありますそしてやつぱり犬が一匹番をして居ります。此の犬はまるで御盆のやうな大きな目を持つてをります。けれ共あなたはちつとも恐れる事は

ありませんやはり前のやうに私の此の前掛を御ひろげになりその上へに犬を抱き下してをけば何とも決してあなたに致しません。もしましたら黙つて早く此の部屋を通り次ぎの第三番目の御部屋に御はいりなさい。此度はまるで水車のやうな大きな目をした犬が御部屋の眞ん中の立派な箱の上にチャンと坐つてゐます。けれ共やはり前になされたやうに此の前掛を擴げその上に抱いて下せば犬は大きな水車のやうな目をパチクリさせますだけで決して咬んだりなど致しません。もしましたらその箱をあけて御覽なさい中にはたくさん金銀やら寶石やらいろいろの立派な物が一杯はいつてゐますからあなたが出来るだけほしいだけもつてゐらつしやい。それから一つ私の御願が御座ります」

と云つて御婆様は兵隊様の顔を見上げました。兵隊様は何やら煙にまかれたやうな氣が致しましてびつくりして御婆様の顔をぼんやりと見つめてをりました。御婆様は更に言葉をつゞけました。

「御頼みと云ふのは他でも御座りませんがその大きな水車のやうな目をした犬の側に小さな火打石がありますからどうぞそれを忘れずに持つて來て下さいませ。」

と頼みました。そこで兵隊様は自分の腰の廻りに紐を結んで貰ひましてどんどんとその杉の木の高い頂上まで登つてゆきました。すると御婆様の云ひました通り大きな洞穴がありました。皆は此の所だなと思ひながらその洞穴から下の方へと降りてゆきました。下まで降りきりますと御婆様の云つた通り廣い場所があつて三つの室がありました。先づ第一番目の御部屋をあけて見ますると真ん中に立派な箱がありました。その上に御皿のやうな大きな目をした犬が番をしてをりました。兵隊様は竝ぞと思ひましたから先刻御婆様から貰ひました前掛を出してひろげその上にエンヤラヤと犬を抱き下ろしました。すると犬は何もしませんでたゞ大きな目をパチパチさせ兵隊様のします事を見てをりました。そこで兵隊様は御婆様に云はれました通り急いで黙つて此の部屋を通

り次ぎの部屋へと参りました。第二番目の御部屋をあけて見ますると此度はま
 るて御盆のやうな大きな目をした犬がチャンと箱の上に番をしてをりました。
 兵隊様は又御婆様に教へてもらいました通りに例の前掛を擴げましてその上
 此の犬を抱き下しました。すると此の犬も咬みも何も致しません御盆のやうな
 目をたゞパチクリ／＼／＼させてゐる計りで兵隊様のする事を黙つて視てをり
 ました。そこで兵隊様は急いで此の部屋を通りこし第三番目の部屋へはいりま
 した。此所は今迄の二つの御部屋とちがひまして大層ひろい大層立派な御部屋
 で御座りました。そして其の眞ん中にはやはり一つの大きな箱が置いてありま
 したその上には一匹の犬がチャンと番をしてをりました。兵隊様がはいつて來
 ますのを見るとその大きな水車のやうな目をぐる／＼廻しまして今にも飛びか
 ころうと致しました。そこで兵隊様は急いで例の前掛を擴げまして此の上に犬
 を抱き下しました。すると不思議にも今迄飛びかゝりそうでした勢の犬が水車
 のやうな目をくる／＼と廻す計りでおとなしく致してをります。そこで兵隊様

は箱の蓋をとつて見ましたらば中には御婆様の云ひました通り澤山な金銀やら寶石やらそれはく立派な目の眩ゆい程の物が一ぱいつめて御座りました。兵隊様は大層よろこびましてその金銀やら寶石やら澤山もちましてそれから此度は御婆様からたのまれました火打石を探しにかゝりました。方々探すまでもなく火打石はすぐに見付かりましたから兵隊様は外に待つてゐる御婆様に。「もうすつかり用意が出来ましたからどうか私の腰にしばつてある紐を外からたぐつて下さいませ。」

と申しました。御婆様は此の聲をきゝまして

「それではそろく〜とたぐりますからおつこちないやうに御用心なさいまし。」と云ひながら外からだんく〜と紐をたぐりはじめました。やがて大分上の方まできましたと思ふ頃どう云ふ拍子でしたか紐がとけまして兵隊様はまつさかさまにおつこちて仕舞ました。やゝしばらくして兵隊様は氣がついて見ますと之は如何に杉の木の中に落ちたとばかり思つて居ましたのに青草のやはらかに茂

つてゐます野原の中央にねてをりました。あたりを見廻しますと自分のそばには火打石と澤山の金銀やら寶石など散らばつてをりました。兵隊様は大層困つて仕舞ました。折角たのまれましたのですから火打石を取つてきましたのに御婆様は影も形も見えませんが火打石を御婆様に渡す事も出来ません。仕方がありませんから石打石と澤山な金銀寶石をもちましてあてどもなくその廣い草原をドン／＼と歩いてゆきました。

やがて二三里もきましたと思ふ頃一人の樵夫の御爺様に出會ひました。そこで兵隊様は丁寧

「どちらへ参りましたら町に出られませうか」

と尋ねますとその御爺様は。

「それは丁度よい都合です。私も町の方に参る所ですがら御一所に参りませう」。

と兵隊様をつれて町へ歸つてきました兵隊様はまた住なれました町へ安全に歸

つてきたのです。昨日までの兵隊様は今は大金持となりました。杉の木の中か
 らたくさんの金やら銀やらを持つてきましたから今は何不自由なく立派な家に
 住ひ立派な着物を着まして毎日／＼楽しく面白く暮してをりました。けれども
 毎日／＼遊んでをりましたからいくら澤山あります金銀もだん／＼と残り少な
 になりました。そこで兵隊様は又いつぞやの杉の木の下にゆき金や銀をどつさ
 り持つてこやうと考へましたからある日の事一人で先日散歩しました田舎道へ
 と出掛けました。ところが草も木も先日と少しも變りはありませんがたゞあの
 大きな／＼杉の木は何處にもありません。それでは場所でも間違ましたのかと
 思ひ方々を探ねましたけれど共どこにもこないだの杉の木は見あたりませんでし
 だ。夕方兵隊様は草臥れて家に歸つてきました。今迄は立派な家に住み立派な
 着物を着てをりましたが今は皆賣つて仕舞いまして兵隊様は小さな家を借りて
 住む事となりました。悪い時に悪い事がつくものです。その中兵隊様は
 重い／＼病氣となりました。もう貯への御金も盡き石油を買ふ御錢さへなくな

りましたから薄暗い部屋に兵隊様はランブもつけず一人ツクネンとねてをりました。だんく〜と夜が更けて参りまして今は何もかも全く見えなくなつて仕舞ました。兵隊様はどうかあかりがほしいと思ひいろく〜考へました末フト先日
の火打石の事を思ひ出しました。

「そうく〜あれを打つたら火がでるでせう。」

と獨言を言ひながら火打石をとり出しました。儲て一撃火打石をカチと打ちますと忽ち一匹の犬が枕元にあらはれました。兵隊様は大層びつくり致してよく見ますとこはいかに先日の御皿のやうな目をした犬なのです。

「何御用で御座りますか。御見受け申す所御病氣の様で御座りますがそれは早速と御薬を持つて参りませう。」

と申すかと思へば又姿は消えてなくなりました。やゝ暫時致しますと御皿のやうな目の犬は口に御薬をくはへ兵隊様の床のそばに又あらはれて。

「私は御薬の番をする犬で御座います。私の番をしてをります箱の中には不老

不死の御藥やらいろく、貴い御藥が澤山つめてあります。」

と云ひながら一服の御藥を兵隊様に渡したした。その御藥を飲みますと不思議や今迄は枕も上がらなかつた病人がたちまち元氣づきました。犬はもうどつかへ居なくなり自分の傍には火打石がころがつてゐる計りです。兵隊様はどうも不思議でくたまりません此度はカチくくと二づ續けて火打石を打ちました。すると又一匹の犬があらはれました。その犬は御盆のやうな大きな目を持つてゐる犬です。そして兵隊様の前にチャンと坐りまして。

「何御用で御座ります。私は食物の番をしてゐます犬です何なりとも持つて参りませう。」

と申すかと思へば又どつかへ消えて仕舞ました。やがて御皿のやうな目をした犬は澤山の御馳走をもつてきました。この犬の番をしてゐました箱は御馳走のはいつてゐる箱なのでした。兵隊様は早速いろくの御馳走をたべ又一層元氣がでましたから此度は元氣よくカチくくと三度火打石を撃ちました。する

と水車みづぐるまのやうな目めをした犬いぬがヒヨツクリ兵隊へいたいせん様の前まへへあらはれ

「何御用なにごようで御座ござります。あなたは大層たいそう汚きたない家いえに御住おすまひになり汚きたない着物きものを召めしてゐらつしたいです。私が只今ただいま金きんや銀ぎんを持つて参まゐりませう」

と云いふかと思おもへば犬いぬの姿すがたは消きえました。暫時ざんじの後のち水車みづぐるまのやうな大おほきな目めをした犬いぬは澤山たくさん金きんや銀ぎんを持つて來きてくれ其その後のちも火打石ひうちいしを三度さんど撃うちさへすればいつも出でて來きて金銀きんぎんをもつて來きてくれますから其その後のち此このの兵隊へいたいせん様さまは一生しやうを安樂あんらくに富貴ふうきに送おくりましたと云いふ事ことです。

(終り)

